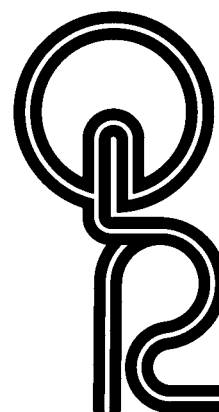


# QR Newsletter

## 第四紀通信

Vol. 26 No.5, 2019



INQUA2019 の総会にて熊井元会長が Honorary Life Fellows のひとりとして承認された。(写真：齋藤文紀)

Vol. 26 No. 5

October1, 2019

会長・副会長挨拶 .....	2	2020 年大会案内 (第 1 報) .....	11
2019 年大会報告 .....	4	シンポジウム案内 .....	11
INQUA2019 報告 .....	5	紙碑 .....	12
2019 年学術賞受賞者報告 .....	6	会員情報確認のお願い .....	13
2019 年論文賞受賞者報告 .....	9	評議員会・総会議事録 .....	13
2018 年学会賞・学術賞記念講演会報告 .....	10	執行部会議事録 .....	22
		会員消息 .....	23

◆会長就任挨拶 齋藤文紀



日本第四紀学会は、2016年の60周年を機に、体制・選挙制度を大幅に変更しました。発足以来の大改革です。新しい体制での運営は前期に始まり、今期が2期目になります。旧体制から新体制への過渡期的な前期から、今期は新たに設定された5つの領域による新体制を活かした実質的な運営をする必要があります。

日本における第四紀研究は、この10年の間に、アジア第四紀学会の発足、2015年のINQUA名古屋大会の開催、Quaternary Internationalから日本特集号の出版など、大きな飛躍を遂げつつあり、近年では日本人が著者に入った論文が、第四紀学に関係する主要な国際学術誌5誌から毎年50編前後出版されるようになってきています。間違いなく日本の第四紀研究は大きく進展してきています。しかしながら本学会では、多くの問題が顕在

化してきています。日本の多くの学会が抱えている学会誌への投稿の減少や会員数の減少など、本学会でも大きな問題となってきています。また前期では学会財政にも問題がみられるようになりました。日本全体としては進展してきている第四紀研究と、本学会活動をいかにリンクさせ学会を発展させるか、また連動して日本の第四紀研究を更に発展させるか、新しい取り組みが必要です。また国際化という面では、INQUAは5つの委員会活動が主要な活動ですが、日本人の参画が少ないという現実があります。新しく設定された領域はINQUAの委員会に対応させて設定されたので、領域とINQUAの委員会活動を連携させ、領域の活動を国際化し発展させる必要があります。INQUAの委員会へは、登録さえしておけば、メールで最新情報を入手することが可能です。是非登録し、INQUAの活動を身近なものにして頂きますようお願い致します（URL: <https://www.inqua.org/commissions>）。一方、社会との関わりを密にするため、本学会ではINQUAの委員会にはない領域5が設置されています。ジオパークや博物館など、いかに協働して双方が利するような活動ができるかも今後は模索してゆく必要があります。

大きな変革期を迎えた本学会において、会員の皆様のご協力を得てこれらの課題に取り組みたいと思います。よろしくようお願い申し上げます。

◆副会長就任挨拶 鈴木毅彦



この度、引き続き日本第四紀学会副会長を務めることになりました鈴木毅彦です。2年前の副会長就任時挨拶では「現在は本学会にとり最も大きな変革期」と記しました。この変革、すなわち領域活動を重視した学会活動への移行化は現在も続いています。これまでの2年間は領域活動の始動期間であり、問題点などもみえてきました。あらたな2年間ではこれらの問題にとり組み、新体制

の仕上げとさらなる学会活動の活性化に繋がりたいと考えています。

一方で、副会長としての私自身の責務はこれまでの「領域の活動の促進と領域間の調整」から「執行部会・常設委員会のとりまとめ」にシフトしました。執行部会ではルーチンとなる学会運営が主たる業務ですが、一方で長期的な視野から学会の将来を考えることもその役割と考えています。最近、新旧の執行部会で現在の本学会が置かれている状況についてフリーな議論がありました。以前から懸念されてきたことですが、現在本学会では会員数と投稿数が減少傾向にあり、近い将来の財政状況や学会誌に関する危機感を改めて共有しました。これは本学会だけの問題ではなく、日本の多くの学会が類似の問題に直面しています。また日本社会の縮図、すなわち少子高齢化のあらわれという側面もあります。悲観的にならざるを得ないようにもみえますが、私は本学会の趣旨や特性、

またこれまでの歴史からいえばやり方さえ間違えなければさらに発展するという楽観的な見方をしています。

本学会の規模はそれ程大きくはありません。本学会の会員の多くは、日本地理学会（約3千人）、日本地質学会（約4千人）、日本考古学協会（約4千人）のいずれかの学会にも所属する場合があります。それらの大学に比べると本学会は4分の1程度の千人規模です。小さければそのネットワークもよく、様々な改革が迅速に効果を発揮する可能性を持ちます。そしてなによりも本学会の特徴は、会員の研究対象や手法、視点が多様であることです。このため、本来であれば交流の機会を持ちにくい者どうしに、第四紀という地質時代の共通性から、議論や情報交換の場を本学会が提供できます。その象徴として、大所帯ではないために、通常の年大会の口頭発表の会場を1会場でできてしまうことがあげられます。

私は今年で本学会会員34年目となりました。この間の第四紀学の進歩は想像以上です。新たな技

術の導入、知られていなかった現象や概念の発見がありました。入会当時には想像もできなかったことが現実になった分野もあります。それらは様々な分野での研究の進展によるものですが、それらの情報をいち早く取り入れたり他分野に伝えたりすることができるのは本学会のよさです。

最近の第四紀学では第四紀諸現象の復元精度が向上し、将来の地球環境予測にも期待が寄せられます。地球温暖化問題もそうですが今後の我々の社会的な問題、例えば自然災害からエネルギー問題、科学と社会の関係など、我々の目の前には問題が山積しています。これらを解くためには単一の専門分野では限界があり、既存の研究分野の垣根を越える必要があります。その様な見方をすれば日本第四紀学会の役割もおのずからよくみえてきますし、本学会の発展性を感じ取ることができます。こうした本学会の特性を最大限活かし、引き続いて日本第四紀学会の新たな展開に貢献していきたいと考えています。

## ◆副会長就任挨拶 高原 光



2019年度から日本第四紀学会副会長を務めることになりました。1995年から2005年まで、研究を進めておりましたバイカル湖や極東ロシアでの野外調査が8月から9月になるため、第四紀学会の大会に参加できない時期がありました。第四紀学会会員としては40年近いかと思います。専門は森林科学ですが、四次元の生態学と称して、特に植生について時間軸を入れて理解しようとする立場で研究を進めてきました。我々人類を含めた生物とそれを取り巻く環境との相互関係を扱う生態学は現在の生態系を扱いますが、それを理解するには、気候や地形などの変化のような環境変動と生物の関係を明らかにする必要があります。第四紀学はまさに、その環境変動と生物を扱う学際的な分野であると思います。

私の副会長としての役目は第四紀学会の組織改

革によって2017年度から設置されました5つの領域の活動の促進と領域間の調整を行うことにあります。私も領域4（人類と生物圏）の代表として2017年から2年間活動して参りましたが、始まったばかりの「領域」という活動で、代表として、どのように活動を進めて行けばいいか手探りの状態でもありました。そのような状況でありながらも、この2年間、各領域において、大会時のシンポジウムや独自の事業に取り組んでこられました。このような各領域における活動をさらに活発にすることは重要であります。第四紀学会の特色であります学際的な学問分野であることを活かして、領域間の共同の取り組みを進めることが、学問の発展につながると思います。現代社会では、急激な気候変動、気象災害、火山活動、地震など、持続的な自然と人類社会の安全にとって、重要な問題がどれも第四紀学会の各領域と深く関係しています。したがって、このような問題に対して、領域間の学際的な取り組みを進めることは、学会活動の社会への貢献にもつながることだと思います。メーリングリストも整備されますので、今後、各領域間の連絡を密にして、領域活動の活性化を進めて参りたいと思います。齋藤会長、鈴木副会長はじめ役員の皆様とともに、微力ながら学会の運営に貢献していきたいと思ひます。会員の皆様のご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

## ◆ 2019年大会開催報告

藤原 治（行事委員長）

2019年8月23日（金）から26日（月）まで、日本第四紀学会2019年大会および関連行事が、千葉科学大学マリーナキャンパス（千葉県銚子市）を主会場として開催されました（写真1）。今回は初の試みとして、銚子ジオパーク推進協議会と共同主催という形をとりました。初秋を思わせる涼しい気候のもと、地元とのコラボレーションで多くの方に参加いただくことができました。昼休みに行われたミニジオツアーや趣向を凝らした懇親会など、銚子ならではの参加者の記憶に残る大会となったと思います。



写真1 口頭発表の様子（植木会員撮影）

24日と25日には一般研究発表が行われ、発表数は口頭33件、ポスター25件が紹介されました。参加者は会員・非会員を合わせて約140名でした。口頭発表プログラムの順番は、研究対象地域が北から南へ並ぶようにして、様々なテーマについて地域の特徴とも合わせて分かりやすくなるよう工夫しました。ポスター会場では、研究対象が研究領域1から5の順に並ぶようにして、両隣のポスターをあわせて議論できるようにしました。千葉科学大学博物館学芸員課程の学生による成果物の展示も行われ、地域の地形や生物など地元ならではのテーマが紹介されていました。また、銚子ジオパーク推進協議会の方々によってジオパーク活動の様子が紹介され、第四紀学会の多くの研究テーマとジオパークとの関係が再認識される内容でした。

口頭発表、ポスター会場、休憩室が講義棟の同じフロアに配置され、会場間の移動は便利でした。受付では銚子特産の醤油が配られ（写真2）、地元の企業がジオパークに参画していることが印象的でした。学生の参加が少なかったのは非常に残念でした。昨年の報告にも書きましたが、学生会員の減少は国内の中小の学会に共通する課題のようです。第四紀学会でも若い世代の参加を増やすべく、さらに取り組みが必要と思います。



写真2 記念に配られた銚子特産の醤油（糟谷会員撮影）

24日に行われた懇親会は、銚子電鉄の車中で開催され、斬新なイベントとなりました。58名の参加者があり、銚子ジオパーク推進協議会の方々にお世話いただき、地元の食材を使った料理とお酒を楽しみました。大会期間中、銚子電鉄の電車には日本第四紀学会のロゴをあしらったヘッドマークが掲示され、非常に良い記念になりました（写真3）。



写真3 大会期間中限定のヘッドマークを付けた銚子電鉄の電車（百原会員撮影）

企業展示には合計5つの企業から出展がありました（㈱加速器分析研究所、アジア航測㈱、㈱パレオ・ラボ、㈱地球科学研究所、一般財団法人東京大学出版会）。展示スペースは口頭発表の会場の前だったので、少々手狭ではありましたが、多くの参加者に展示を見ていただくことができました。

25日には「銚子市すこやかなまなびの城」を会場に、午前中に公開シンポジウムが、午後には普

及講演会が開催されました。公開シンポジウムは「関東平野東部における第四紀研究の最近の成果」と題して5件の講演がありました。約90名の参加者があり、銚子地域と関わりの深い層序・テフラに基づく第四紀編年研究や、銚子市名洗層「下部」の鯨類化石群の講演には特に注目が集まりました。普及講演会は「第四紀研究の最前線」と題して年縞堆積物の研究と、関東地域の地震・津波の研究の合計2件の講演が行われました。日曜の午後ということもあって参加者は約50名程度でしたが、地球環境問題や地元の防災にかかわる話に、皆さん熱心に耳を傾けていました。公開シンポジウムと普及講演会は、ジオパーク市民の会にとって普段は聞けない専門的な話を聞く貴重な機会になりました。

講演会と同時に会場1階のロビーでは、「ジオ」に関する様々な展示が行われ、産業技術総合研究所地質調査総合センター、国土地理院による研究

紹介のほか、銚子、筑波山地域、茨城県北の各ジオパーク、「チバニアン」に関する地元の町内会による展示などが行われました。多くの市民に最先端のジオ研究や地元の活動に触れていただく機会となりました。

巡検は「ミニジオツアー」(8月23日、24日)、「ジオパーク体験巡検」(8月25日)、専門巡検「銚子周辺における第四紀の地形・地質・考古」が実施されました。銚子のジオを専門的な解説とともに楽しめるとあって多くの参加者がありました。ただし、波が高いために「サンセットクルーズ」(8月23日)が中止になったのは非常に残念でした。

今回の銚子ジオパークとの連携は学会運営にとって非常に良い経験となりました。来年以降も、地元との連携や地元に関連したシンポジウムの開催など、執行部や行事委員会、大会実行委員会で検討していきたいと思えます。各行事の詳細については次号の第四紀通信で紹介予定です。

## ◆第20回国際第四紀学連合大会、INQUA2019 ダブリン大会報告

齋藤文紀

2019年7月25日～31日にアイルランド、ダブリンのコンベンションセンターダブリン(CCD)において第20回国際第四紀学連合大会、INQUA2019 ダブリン大会が開催された。最終日における主催者の発表によれば、参加者2539名(女性1117名、男性1422名)、参加国75ヶ国、口頭発表1185件、ポスター発表1476件。22の巡検への参加者585名、コーヒー・紅茶28308杯、昼食14154食であった。日本からの参加者数の報告はまだ公表されていないが、プログラムでの発表者は58名であった。本大会期間中に開催された国際評議員会へは、日本代表として出穂雅実、副代表として小口 高が参加した。第1回会合は兩名が参加できなくなったため齋藤文紀が出席した。

国際評議員会における投票の結果、2019-2023の新規体制が決定し、会長 Thijs van Kolfschoten (オランダ)、副会長 Brian Chase (フランス)、Laura Sadori (イタリア)、Zhengtang Guo (中国)、会計 Freek Busschers (オランダ)、事務局長 Eniko Magyari (ハンガリー)となった。

副会長の1名は欠員のままで、公募の案内が近々に出される。今期から各副会長の役割が明確化され、公募の副会長は publication を担当する。また各コミッションの体制も確定し、コミッションへの日本からの参加は、HABCOM 副委員長に出穂雅実、アドバイザーボードには、CMP に横山祐典、PALCOM に阿部彩子、SACCOM に菅沼悠介、岡田 誠が就任した。Honorary Life Fellow には7名が選ばれ、日本から推薦した熊井久雄名誉会員が選ばれた。次の開催地は、イタリアのローマとインドのラクナウが立候補し、投票の結果、ローマ23票、ラクナウ8票でローマに決定した。

各コミッションでは、メンバーの募集と登録を行っており、INQUA のホームページの各コミッションのページから登録することができる(<https://www.inqua.org/commissions>)。

登録によって、各コミッションからメール配信によって活動や会合の案内が届くので、是非積極的な登録参加をお願いしたい。

## ◆第20回 INQUA2019 Dublin 大会 参加報告

長島佳菜 (国立研究開発法人 海洋研究開発機構)

梅雨明け前の肌寒い日本を出発して、もっと肌寒いダブリンに到着した。前回の名古屋大会のうだるような暑さを懐かしく思い出す。さて、ダブ

リンの街の中心を東西に流れるリフィー川に面した Convention Centre Dublin が INQUA2019 の舞台である。ガラス張りの吹き抜けが特徴的な建物

で、各フロアからはゆったり流れる川面や船を見下ろすことが出来る。

私にとって、今回が4回目のINQUA参加となる。最初に参加したのは、博士課程の学生であった2003年アメリカ・リノ、海洋研究開発機構で職を得てしばらく忙しくなり、次に参加したのは育休を終えて職場に復帰してすぐの2011年スイス・ベルン、2015年の日本・名古屋、そして今回のアイルランド・ダブリンである。INQUAは対象とする研究の幅が広く数多くのセッションを擁するため、パラレルでセッションが開催される。どの日・時間帯においても、私にとって興味深いセッションが開催されており、朝から晩まで(残念ながら)ほとんどガラス張りの建物の中で過ごすこととなった。個別のセッションの印象や素晴らしかった発表の事などを述べているとページが何枚あっても足りなくなるため、敢えて発表以外の副産物から今大会を振り返りたいと思う。

学会に於いて、面識のない人にも積極的に声を掛けることができるようになったのは、良い塩梅の年齢と共に恥じらいがなくなってきた名古屋大会からである。今回のダブリン大会では躊躇を忘れ、発表が面白かった人、貴重な試料を持っている人、これまでに読んだ興味深い論文の著者に次々と声を掛け、学会会場の片隅で互いのデータを見せ合って議論を行った。最初は何故声を掛けられたのか訝しがっていた人が、共通の興味から



徐々に気持ちがあほぐれ、共同研究の話に発展したことが、何よりもの副産物である。それにしても、ここまで積極的になれたのは、やはり舞台がINQUAだったからという気がしてならない。私自身は堆積物中のダストを対象として過去の大気循環場を復元する研究を長らく行ってきたが、ダストに関しても、また過去の大気循環場の復元に関しても、今大会で数多くの発表を聞くことが出来た。どんな専門であっても、INQUAのようなおおらかで懐の広い国際学会では、繋がれる人が沢山いるのではないかと思う。やはりINQUAへの参加は、私にとってなけなしの国際性を鍛える素晴らしい機会であると実感した。

## ◆学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告

### (1) 選考経緯

日本第四紀学会の2019年学会賞等の候補者の推薦は2019年1月31日をもって締め切られた。2019年4月21日に早稲田大学において学会賞選考委員会(齋藤文紀委員長、久保純子副委員長、遠藤邦彦委員、小野昭委員、中村俊夫委員)を開催し、推薦があった候補者について、2019年日本第四紀学会学会賞、同学術賞、同若手学術賞の選考を行った。選考委員会会合においては、推薦のあった候補者について候補者の資格の確認後、日本第四紀学会顕彰規程と関連する内規に基づき、推薦書、各候補者の業績目録などを参照して審議を行い、2名の学術賞受賞候補者を決定した。推薦文については、選考委員会会合において推薦文を元に原案を作成し、メールで再度検討を行い、推薦文を確定した。選考委員会から推薦された学術賞受賞候補者について、2019年6月30日に開催された2018年度第3回評議員会で承認された。

### (2) 受賞者

#### 学術賞

受賞者名：奥野 充 会員(福岡大学)

受賞件名：放射性炭素年代測定に基づく第四紀後期の火山活動史と古環境・考古編年への貢献

受賞理由：

奥野 充会員は、後期更新世・完新世の年代決定の基軸となっている放射性炭素年代測定法を修得して以降、この年代測定を基に、完新世・後期更新世の火山活動史と古環境・考古編年に多くの年代的新知見を与えてきた。火山、古環境・考古など多分野の第四紀研究者と様々な地域において共同研究を行うことによって、100編を超える学術論文を公表してきた。中心となる研究はテフラの放射性炭素年代に基づく年代決定に関わるもので、代表的なものとして南九州の諸火山の噴火史・テフラ年代決定の一連の研究がある。始良カルデラと桜島火山起源のテフラに介在する腐植土層の系統的な年代測定により層序・噴火史

を明らかにし (Okuno et al., 1997; 長岡ほか, 2001)、周辺の鬼界、阿多、霧島起源のテフラまで展開した (奥野ほか, 2000; 奥野, 2002)。これらの成果は、当該地域の古環境や考古遺跡の年代確定にも大きな役割を果たしてきた (Okuno et al., 1998, 2012; 奥野ほか, 1999 など)。更に、雲仙、九重、鶴見、焼岳、箱根、榛名、高原、北八甲田などの国内の火山、また、米国アリューシャン列島のアダック島やカーライル島、フィリピンのイロシンカルデラやパイタン湖、韓国の鬱陵島、中国の長白山、インドネシアのバリ島ブヤンブラタンカルデラなど、国内外の火山活動史を明らかにし、同様に古環境や考古編年においても多くの年代指標を与えてきた。こうした一連の研究は、放射性炭素年代学を基礎に、個々の地域に分布する広域テフラ以外のテフラをも包括する噴火史 (火山活動史) を軸として、地域の古環境や考古編年を結合させた地域研究の推進という、一つの方向性を与えている。更に最近では、テフラの精密な年代決定に向けて、テフラや火砕流堆積物中に埋もれた樹木年輪を用いるウイグルマッチング法や放射性炭素スパイク法などの手法を取り入れた研究を推進している。

このように放射性炭素年代測定を軸とした火山活動史と古環境・考古編年における奥野会員の業績は、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

### 〈受賞者の言葉〉 奥野 充



このたびは栄えある「日本第四紀学会学術賞」をいただき、本当にありがとうございました。たいへん名誉なことだと思っています。受賞件名の「放射性炭素年代測定に基づく第四紀後期の火山活動史と古環境・考古編年への貢献」は、鹿児島大学の卒業論文「開聞岳火山の地質」(1989年)で、指宿市の橋牟礼川遺跡を訪れ、『三代実録』の記述に触れて以来、火山噴火と人間社会・自然環境との関わりについて付かず離れず続けてきたテーマです。卒論では小林哲夫教授、成尾英仁博士、指宿市の下山 覚博士をはじめ多くの方々にお世話になりました。卒業後、種子島の国上中学校に勤務したときのテフラ研究を『第四紀研究』に初めて投稿し、その際、森脇広教授 (鹿児島大学) や長岡信治教授 (長崎大学) にご助言いただきました。

そして、金沢大学大学院で守屋以智雄教授の指導のもと、北関東 (日光、高原、那須) で水蒸気噴火による降下テフラを調査し、名古屋大学での放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定も開始しました。博士後期課程では名古屋大に編入し、中村俊夫教授のもと南九州での噴火史研究を進め、始良カルデラのカルデラ形成噴火と後カルデラ火山 (桜島) の噴火活動の休止期間がカルデラ火山像の理解に寄与すると思っています。また、桜島のテフラの年代は上野原遺跡などの編年にも役立っています。1998年に福岡大学理学部にポストを得て以来、卒論・修論生らと九重や由布・鶴見など中部九州の火山も歩いています。

海外の島嶼域においても噴火史や  $^{14}\text{C}$  年代学の研究を展開しています。アリューシャン列島の Adak 島や Fox 諸島での Dixie West 博士 (カンザス大学)、Virginia Hatfield 博士 (アリューシャン博物館) や Arkady Savinetsky 博士 (ロシア科学アカデミー) らとの日米露共同研究、フィリピン共和国の Batan 島 Iraya 火山での Dizon Eusebio 博士 (フィリピン国立博物館) や Renate Solidum Jr. 所長 (PHIVOLCS) との国際共同研究、藤木利之博士 (岡山理科大学) が研究代表の科研費「クック諸島の人類到達に関する研究」にも参加しています。この過程で遺跡やテフラ、古環境情報を記録する地層の特性評価の重要性を認識しました。島嶼域における海面と海況変化が、人間の移動にどのような影響を与えたか、また、その痕跡である遺跡の保存にどのような結果をもたらしたかに注目しています。例えば、植生変化を記録する泥炭層と考古遺跡の保存の違いなどです。

これまで多くの方々との出会いと研究が、今回の受賞につながったと感謝しています。2019年は、『第四紀研究』の特集号「第四紀研究から防災・減災への多角的アプローチ」を特集号委員長として刊行しました。この特集は2016年熊本地震をひとつの契機に、竹村恵二教授 (京都大学) をはじめ、若手からベテランまで蒼々たるメンバーの論文を収めています。鹿児島大学の同窓生である鳥井真之博士 (熊本大学) と遠田晋次教授 (東北大学) の協力を得られたことを嬉しく思います。今後はこの受賞に値する研究を進められるように努力します。最近、榛名二ツ岳軽石 (Hr-FP) のウイグルマッチング年代を公表し、世界標準の暦年較正曲線 IntCal と日本の  $^{14}\text{C}$  濃度変化に差がある時期があることを示しました。海洋の影響を受けやすい島嶼域での高精度  $^{14}\text{C}$  編年の困難さを感じています。最後に調査や学会などで不在がちな家庭を守ってくれている妻と2人の娘にお詫びと感謝の意を表します。なお、文中の所属と職位は、現時点とは違うことがあります。ご容赦ください。

**学術賞**

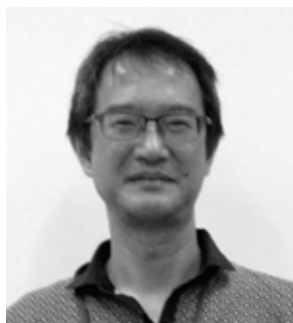
受賞者名：長橋良隆 会員（福島大学）

受賞件名：化学分析に基づくテフラの岩石学的特徴と広域対比・編年の研究

受賞理由：

長橋良隆会員は、長年にわたり大阪層群・上総層群などの第四系に挟まる代表的なテフラやボーリングコア中のテフラの分析、とりわけ火山ガラスの EPMA や XRF を用いた化学分析を行い、その分析値をカタログとして示すとともに、広域対比を進めてきた。第1の大きな貢献は、中部山岳地域を噴出源とする大規模火砕流堆積物などを詳細に調査・分析し、共同研究者と共に周辺の鮮新—更新統中のテフラとの対比を行って、前期更新世の重要な広域テフラである穂高—Kd39、恵比須峠—福田、大峰—SK110 の分布像と噴出年代を明らかにし、各地で観察される降下あるいは流下テフラが一連の火山活動のどのユニットに当たるかを明らかにした点である。特に噴出源から南西側に位置する近畿や東海地域の鮮新—更新統中にこれらの厚いテフラが見いだされるイメージが明快に示された（長橋ほか、2000 など）。第2の大きな貢献は、大阪湾沿岸や琵琶湖のボーリングコア及び八ヶ岳山麓の中期更新世中頃以降の主要なテフラを分析し、広域対比を行って堆積速度などを基にその詳細な降灰年代を明らかにした点である（長橋ほか、2004）。特に阿蘇火山起源のテフラは阿蘇4以外不明な点が多かったが、阿蘇1、2、3 サイクルのテフラとの対比を行い、広域テフラとして認識された。EPMA による化学分析値は、XRF 分析との比較などにより補正がなされている（長橋ほか、2003）ため、ほかの研究者による分析値と比較が可能で、カタログとしての価値も高い。大阪層群のテフラの分析値も公表されており（長橋ほか、2015）、広域対比がまだなされていないテフラでも、地球化学的・岩石学的特徴を把握することができ、将来的に新たな対比を検討する上でも貴重な情報を提供している。ボーリングコアでは、さらに長野県高野層コア（長橋ほか、2007）、野尻湖底コア（長橋・石山、2009）、猪苗代湖コア（長橋ほか、2018）などでも、多くのテフラの分析と対比を行っている。

このような長橋会員による第四紀全体を通しての多くのテフラの化学分析を中心としたカタログの作成や対比・編年などの研究は、日本のテフラ層序学の進展に大きく貢献したと考えられ、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

**〈受賞者の言葉〉 長橋良隆**

この度は栄えある第四紀学会学術賞を授与していただき、誠に光栄に存じます。推薦していただいた方並びに選考委員の皆様には厚く御礼申し上げます。

EPMA を初めて操作したのは信州大学大学院修士課程在学中で、日本電子製の JXA-50A という波長分散型の EPMA でした。これには分光器が3つ付属していますが、測定中は常に電流値などをモニターするため、装置から離れることができません。昼にフィラメントを点灯し、照射電流が安定する夕方になってから分析を始め、ほぼ夜通しで分析していたように思います。鉱物学が専門の同期の友人に分析を勧められ、測定用プレパラートの作成、EPMA の操作、測定データ処理の全てを教してもらいました。

大阪市立大学大学院後期博士課程在学中は、当時福島大学におられた木村純一さんに分析に来ないかと誘っていただき、火砕流堆積物中の軽石の蛍光 X 線 (XRF) 分析による主要元素・微量元素組成と火山ガラスの EPMA 分析を行いました。福島大学の EPMA は、エネルギー分散型 (EDS) の検出器で、液体窒素で冷却するタイプでした。多元素同時分析ですので効率は良い (1 時間で 12 点程度分析できた) のですが、分析値をデータとして取り出すことができなかつたため、分析結果を印刷し、火山ガラスにビームをあてている間にパソコンに数値を入力していました。今からすればアナログですが、この経験が分析値のばらつきや特徴を把握するのに役だったのかもしれませんが。この装置は私が福島大学に着任した 1997 年以降も稼働を続けますが、2008 年頃から検出器とアナライザー PC 関連の不具合のため、きちんと分析ができないう状態となってしまいました。もう火山ガラスの EPMA 分析をあきらめようと思っていたところ、2009 年度に科学研究費補助金の基盤研究 B に採択され、検出器を SDD タイプの EDS に更新することができました。この時の嬉しさはいまでも鮮明に憶えています。

分析装置についての思い入れも大きいのですが、層序学を基盤として、火山や第四紀の地質学に身をおくものとしては、分析試料の性質に応じて分析結果を正当に評価することが肝要です。長野県北部にある野尻湖の発掘に関わる調査・研究では、テフラ鍵層について、風成環境から河川や湖岸の水成環境まで、さらに火口近傍相から遠方相までを観察しました。同じテフラ鍵層であっても堆積環境によって異なる層相を示すこと、その構成粒子を顕微鏡で観察し特徴を把握すること、この繰り返しによってテフラ層と構成粒子を見る目を養い、テフラ層や地層の対比について緻密に議論したことが私にとって大きな糧と



なっています。また、最近の驚きは、猪苗代湖の湖底堆積物に挟まる密度流堆積物に新鮮な火山ガラスが含まれることで、我々は、この火山ガラスが磐梯山の Magmatic hydrothermal eruption に伴う噴出マグマであると結論づけています (Kataoka and Nagahashi, 2019, *Sedimentology*, <https://doi.org/10.1111/sed.12629>)。火山ガラスとそれを含む地層と構成粒子をつぶさに見ること、良質な分析結果を系統的に積み重ねることが、新たな発見に繋がることを実感しました。

最後になりましたが、信州大学と大阪市立大学の在学中にご指導いただいた諸先生、共同して研究を推進していただいた研究者の皆様に感謝申し上げます。

## ◆論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告

### (1) 選考経緯

論文賞受賞者選考委員会（横山祐典委員長、前空英明委員、近藤 恵委員、納谷友規委員、田力正好委員）により、日本第四紀学会論文賞・奨励賞選考に関する内規に従い、2017年、2018年の第四紀研究に発表された論文を対象として審議が行われた。なお、候補論文については、期日までに会員からの推薦はなかったため、該当する論文すべてを対象に選考委員会によって選考が行われた。選考委員会から推薦された論文賞1件について、2019年6月30日に開催された2018年度第3回評議員会で承認された。

### (2) 受賞者・受賞論文

#### 論文賞

受賞論文：「西南日本・紀の川流域に分布する鮮新—更新世菖蒲谷層群テフラの識別と対比（英文）」  
第四紀研究 57 巻 (2018)、6 号、p.211-227

著 者：丸山誠史・竹村恵二・平田岳史・岩野英樹・山下 透・檀原 徹

受賞理由：

本論文は、紀の川流域に分布する鮮新世—更新世の地層に含まれるテフラについて、レーザーアブレーション ICP-MS (LA-ICP-MS) 法を用いて元素組成濃度について化学分析を行っている。さらに LA-ICP-MS 法とフィッシュトラック (FT) 法を用いた年代測定を菖蒲谷層群の根来断層近くで発見された菩提峠火山灰試料に行い、元素組成結果と組み合わせ考察を行っている。

58 元素の濃度について分析した結果に関してその元素パターンは、五條 4 については猪牟田ピンクテフラと、菖蒲谷 1 については恵比須峠—福田テフラのものと極めて類似していることが明らかとなった。さらに始良 Tn (AT) テフラのものと菩提峠および新池火山灰層試料の元素濃度パターンが似通っていることを見出した。筆者らはさらに ICP-MS によるウラン鉛年代測定法と FT 法により年代測定を行うことで、それぞれのテフラの対比と層序関係などについて議論を行っている。ここで新しく得られたテフラの化学分析結果と年代測定結果については今後紀の川地域の第四紀地質学を研究していく上で極めて重要な知見となった。

以上のように本論文は、多くの化学分析によりテフラの組成について詳しく記述し、フェムト秒レーザーを使った分析結果などテフラ研究への新しい分析の形態を提供したという意味でも新規性と発展性を備えていると評価できる。すなわち、本論文で用いられた手法と、今回系統的にテフラを対比した成果は、特に西南日本の鮮新世—更新世の第四紀地質学の発展に寄与すると期待されることから、本学会の論文賞にふさわしいと判断する。

### 〈受賞者の言葉〉 丸山誠史 .....



このたびは、日本第四紀学会論文賞という名誉ある賞をいただき、有り難うございました。本論文では、テフラに含まれる火山ガラスの主要・微量元素濃度同時分析によって得られた元素濃度パターンの類似性に基づき、テフラの対比を試みています。フェムト秒レーザーを用いた LA-ICP-MS 法による多元素定量分析によって、「比較の手がかり」となる元素数を電子線による分析法の 6 倍程度に増やすことによって、より確度の高いテフラ対比を行うことが、本手法を開発、採用した最大の理由です。

本手法では、電子線によって測定されている主要元素 (Ca や Al などの軽元素) に関しても、希土類元素などの重元素と同時に測定しています。ICP-MS 法では、軽元素の測定に関しては妨害イオンの存在などの問題があり、特に Ca や Ti、Fe といった火山ガラスの主要元素に関しては時とし

て値のばらつきが大きくなる傾向がありますが、得られる値は従来法によるものからさほど外れるものではなく、多くの場合充分議論に耐えうるものと考えております。一方で、電子線による主要元素測定値は、LA-ICP-MS法による多元素測定を行う際に良い指標となる（特にSiO<sub>2</sub>の値）、大変有益な情報であると言えます。電子線法とLA-ICP-MS法は、火山ガラス化学分析の「車の両輪」として、互いの長所を活かしつつ用いることが、今後ますます重要になってくるものと思います。

本論文では、先行研究のデータとも元素濃度パターン比較を行っていることが、実は大きな「前進」の一つです。自分たちの取得した測定値の間だけで成立し得る「閉じられた」議論に終始するのではなく、他のラボで測定された値とも比較が問題なく可能なことを示すことができたのは、取得データ取扱い（相互比較等）の柔軟性確保、保持という点でも、大変意義深いものと考えております。

本論文で扱った根来断層菩提峠試料は、始良 Tn テフラよりも大幅に古い年代測定結果が得られた一方、火山ガラスの元素濃度パターンは始良 Tn テフラと非常に似通っています。さらに始良カルデラが給源と推定されている、始良岩戸や麓、樋脇テフラとは、元素濃度パターンの傾向は酷似するものの分離可能ということも、パターン比較と測定値の数理統計的検定で判明しています。菩提峠テフラの給源が始良カルデラである可能性は高いと思われませんが、未だ確定的ではありません。しかし今後、南九州テフラ群に関する化学的情報が増えていけば、菩提峠テフラの給源火山や、他の南九州テフラとの関係も解明できる可能性はあるでしょう。今後も、火山ガラスの多元素定量分析データに対して、本論文で採用したチューキー・クレーマー検定法などの数理統計的手法を適用することで、さらにきめ細かいテフラ識別・対比法を進展させていく所存です。無論、ガラスや鉱物の屈折率や構成比など、テフラの岩石学的特性は、それらの議論を行うための基盤を成す、必要不可欠な情報であることは、言うまでもありません。

最後になりましたが、当初は一本のストーリー（＝論文）に纏めることがなかなか困難かもしれないと思われた、菖蒲谷層群テフラ試料の対比と層序関係の解釈や各種データ取得のために尽力いただいた共著者はもちろんのこと、論文公表のために力をお貸しいただいた全ての方々に、厚く御礼申し上げます。

## ◆日本第四紀学会 2018 年学会賞・学術賞受賞記念講演会（第 2 回）開催報告

林崎 涼（一般財団法人電力中央研究所 地球工学研究所）

2019年6月30日に、第2回目の学会賞・学術賞記念講演会が東京大学理学部2号館で開催された。講演者は学会賞を受賞された山崎晴雄会員（首都大学東京名誉教授）と学術賞を受賞された森勇一会員（東海シニア自然大学）の2名である。山崎会員の受賞タイトルは「南関東を中心とした活断層の活動史にもとづくネオテクトニクスの研究」、森会員の受賞タイトルは「昆虫化石に基づく古環境と生業活動の復元に関する研究」である。梅雨のジメジメとした中での開催であったが、45名の参加があった。齋藤会長の挨拶に続いて、山崎会員、森会員の順で講演が行われた。

山崎会員は「地形発達史研究40年～南関東を中心とした活断層の活動史にもとづくネオテクトニクスの研究～」と題して講演された。大学生時代の授業で、家の近くにあった坂が段丘崖（国分寺崖線）であったことを知り、地形発達史に興味を持ち、それから40年以上にわたり続いた山崎会員の地形発達史研究の経歴を振り返るものであった。多岐にわたる研究の中で、南関東の破碎帯の見えない活断層である国府津松田断層帯と立川断層のお話が主であった。火山灰やボーリングデータなど、様々な手法やデータを組み合わせて活断層を認定することはまさに地形発達史の研究であり、地形（第四紀）研究は少数のデータだけに頼っ

てはいけないこと、様々なデータから地形の発達を推理していく“名探偵の手法”で取り組む必要があるという話であった。

森会員は「昆虫考古学を究める～土の中のムシから地球の歴史、ヒトの営みを知る～」と題して講演された。高校の先生であった時に、埋没文化財の調査に派遣され、古墳時代の土の中から出てきたムシ（タマムシ）の化石がきっかけとなり、今まで続けてこられた昆虫考古学の研究について紹介された。それまでの遺跡調査では捨てられていた土の中の昆虫化石から、弥生・縄文時代における人の営みを明らかにした多くの研究を話されたが、特に縄文時代における農耕と酒造りをしてきた可能性が昆虫化石から推定できたとのお話は非常に興味深かった。昨今昆虫食が注目を集めているが、縄文時代から昆虫食があった可能性が土器に残るムシの跡から分かっており、今も昔もムシは重要な存在であることが分かった。

本講演を聞き、両会員のように様々な分野の知識や経験を吸収することで、広くものごとを見ることができることがよく分かった。特に第四紀学のような分野では、ものごとを多角的に見ることが新たな可能性に結びつくことを心がけて、今後の研究に取り組んでいきたい。

## ◆日本第四紀学会 2020年大会案内(第1報)

2020年大会は以下の概要にて開催の予定です。但し実施校の事情で日程変更の可能性もあります。

日程：2020年8月28日(金)～31日(月)  
 一般発表・総会 8月28日(金)～29日(土)  
 公開シンポジウム 8月30日(日)  
 巡 検 8月31日(月)

会場：大阪市立大学

大会実行委員長：三田村宗樹(大阪市立大学)

実行委員：行事委員会で担当

## ◆地球環境変動と人間活動—世界各地で急速に深刻化する地球温暖化の影響と対策—

主 催：日本学術会議 地球惑星科学委員会 地球・人間圏分科会

後 援：JpGU、地理学連携機構、日本地理学会、東京地学協会、日本第四紀学会、日本地形学連合、日本水文科学会

開催日時：2019年12月21日(土) 13:00～17:00

開催場所：日本学術会議講堂

趣旨説明：地球温暖化による異常気象は既に多くの人々の共通認識になりつつあるが、気候変動の影響範囲は世界各地の気候や植生に具体的な影響を及ぼし始めている。極域や砂漠、高山といった人類生活にとって極限的な環境の地域や、陸と海の境界など縁辺域ではとくに顕著である。こうした影響は一部に留まらず、世界規模の災害や食料問題にも発展する可能性がある。既に現実のものとなりつつある温暖化の様々な問題を総合的に認識し、国際社会における対策の方向性を議論する。

全体司会：山田育穂(日本学術会議連携会員 東京大学空間情報科学研究センター教授)

13:00-13:05 開会の挨拶... 平田 直(日本学術会議連携会員 東京大学地震研究所教授)

13:05-13:15 趣旨説明... 鈴木康弘(日本学術会議連携会員 名古屋大学減災連携研究センター教授)

13:15-13:35 海と陸の境界—デルタで何が起きているか... 齋藤文紀(日本学術会議連携会員 島根大学エスチュアリー研究センター教授)

13:35-13:55 海と陸の境界—サンゴ礁の急激な変化... 山野博哉(国立環境研究所生物・生態系環境研究センター長)

13:55-14:15 海洋生態系に対する脅威と海洋環境の保全... 植松光夫(日本学術会議連携会員 東京大学名誉教授)

14:15-14:35 極域雪氷圏の環境変化—南極・グリーンランド氷床と山岳氷河の融解... 澤柿教伸(法政大学社会学部准教授)

14:35-14:50 休憩

14:50-15:10 高緯度地域の環境変化—シベリアとモンゴルの永久凍土の変動... 檜山哲哉(名古屋大学宇宙地球環境研究所教授)

15:10-15:30 乾燥地域の環境変化と農牧業—砂漠化の変遷... 篠田雅人(日本学術会議連携会員 名古屋大学大学院環境学研究所教授)

15:30-15:50 人類世における水問題... 谷口真人(日本学術会議連携会員 総合地球学研究所副所長)

15:50-16:10 気候変動と人類... 稲村哲也(日本学術会議連携会員 放送大学教授)

16:10-16:55 総合討論:司会... 小口 高(日本学術会議連携会員 東京大学地理空間情報センター教授)

16:55-17:00 閉会の挨拶... 奥村晃史(日本学術会議連携会員 広島大学教授)

問い合わせ先：鈴木康弘(名古屋大学) 052-788-6037 dmrc.nagoya.geo(at)gmail.com

## ◆ペドロジスト 永塚鎮男会員を偲んで

本会員の永塚鎮男先生は2019年3月31日に多摩市聖蹟桜ヶ丘のご自宅にて享年84歳で逝去された。日本のペドロジー（地球表層部に発達する土壌の生成・分類・分布を研究する自然科学の一分野）のプロモーターの一人であり、第四紀学的視点から土壌層の研究を進めてこられた。この間に「第四紀研究」編集委員、評議員を歴任し、2011年には功労賞を受賞された。

先生は1935年に東京で生まれ、その後1955年に東京大学に入学されて土壌生成分類学の基礎を学んだ。1959年、農林省東北農業試験場に技官として赴任して現地での土壌実験の実務を学んだ。1961年に農業技術研究所に転勤した。先生はここで10年余の歳月をかけて「赤色土・黄褐色森林土・褐色森林土の生成過程および性質の差異を明らかにし、これらの土壌の分類学的位置づけを明確にする」研究を進めた。段丘上に発達する各土壌層を地形発達的时间軸に組み込み、一方各土壌層の特性を遊離鉄の存在形態から「結晶化指数」と「活性度」を設定して、土壌層の分類を行い、第四紀地史の中に土壌生成を位置づけた。この研究により1974年に東京大学から農学博士の授与、そして1979年には日本土壌肥料学会賞を受賞した。



沖縄の土壌調査 中央：故永塚鎮男会員  
右隣：故松井 健会長（撮影：1993、渡邊眞紀子）



故永塚鎮男会員 1935～2019  
（撮影：2010年頃、川崎市麻生区百合ヶ丘）

先生は1974年に東京教育大学、そして1976年に筑波大学に移られた。そして研究は亜熱帯気候下の喜界島、沖縄の石垣島や南大東島での赤色土と、その類縁土壌の生成に向かった。低位、中位、高位段丘から構成されており、段丘は離水後等速度で隆起することに着目して、離水後の土壌生成開始時期・期間を推定した。低位から高位段丘に移り変わるに従い、岩石土→レンジナ様土→テラフスカ様土→テラロッサ様土→赤色土→ラテライト性赤色土に至る土壌生成系列を明らかにした。赤色化作用は土壌生成開始から約5万年経てから始まり、赤色土の生成には約12万年の期間を、そしてラテライト性赤色土の生成には50万年を超える期間を要することを提示した。これらの成果は「第四紀研究」に英文原著として掲載した(2001; 2002)。

先生は数多くの書籍を刊行され、そのうち第四紀学視点から「土壌生成分類学」(1998; 改訂2010)、「原色日本土壌生態図鑑」(1997)は格別である。両書とも土壌層の成立を自然環境中で育むものとして、土壌断面の性状や産状、自然環境因子を詳細に説明されている。土壌層は過去の環境の記録媒体として知られており、その際に両書から貴重な情報が得られる。なお、後著は筑波大学を退官の際に(1998)、自らの発案のもとに刊行された。

ここでは第四紀学の視点から先生の歩みの一端を書き印した。最後になりますが、先生のご逝去に対して、ここに謹んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

(東京自然史研究機構 細野 衛)

### ◆会員マイページによる会員情報確認のお願い

日本第四紀学会では、会員マイページを開設し、web上で、ご自身の住所、所属先、電子メールアドレス、会誌等の送付先などの確認・変更ができるようになりました。役員選挙もマイページを利用して電子投票することになっています。マイページのログインページ、会員ID番号、初期設定のパスワードは2018年12月に郵送されています。

ご自身の会員情報は日本第四紀学会のホームページ (<http://quaternary.jp/>) のトップページにある「会員マイページ」ボタンをクリックし、会員ID番号、パスワードを入力し、ログインすると確認することができます。会員ID番号は、また、2か月に1回郵送される会誌が入った封筒の会員宛名の下に書かれている10桁の数字と同じです。会員番号が不明の方は、第四紀学会事務局(daiyonki(at)shunkosha.com)あてに、ご自身の氏名、メールアドレス、第四紀学会員であることを証明する所属先・現住所などの情報を記して、お問い合わせください。パスワードをお忘れの方は、会員マイページの「パスワードをお忘れの方へ」のところをクリックして、会員ID番号と登録された電子メールアドレスを入力して送信すると、登録されたメールアドレスにパスワード変更用のアドレスが送信されます。

なお、2018年12月以降に入会された会員へは、マイページの案内を順次お送りしていますので、今しばらくお待ちください。

日本第四紀学会ではメーリングリストを利用して、様々な連絡・案内をしています。メール登録されていない方、古いアドレスのままになっている方がかなりおられます。また、連絡先の変更届を提出されていないために、会誌や会費請求書が戻ってくる場合もあります。そのため、できるだけ会員マイページを利用して、会員情報の追加・変更を会員自ら行っていただきますようお願いいたします。なお、パソコンなどweb上でマイページを利用できる環境にない会員の方は、従来通り郵送などで会員情報の変更をご連絡いただければ結構です。

将来的には、数年に1回発行している会員名簿は廃止し、マイページ上で、会員が外部公開可としている情報を閲覧することができるようにする計画です。皆様のご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

(庶務委員会)

### ◆日本第四紀学会 2019 年度第 1 回評議員会議事録

日時：2019年8月23日(金) 10:30～12:00

場所：千葉科学大学2号棟2208教室

出席：齋藤文紀(会長)、鈴木毅彦(副会長)、高原光(副会長)、横山祐典、奥村晃史、苅谷愛彦、藤原治、三浦英樹、青木かおり、長橋良隆、兵頭政幸、水野清秀、工藤雄一郎、那須浩郎、百原新、植木岳雪、米澤正弘(以上、評議員)

オブザーバー：吾妻 崇(前庶務委員長)

藤原行事委員長の進行で開会され、齋藤会長の挨拶、副会長・評議員の自己紹介に続き、定足数の確認が行われた。出席17名、委任状17通で、評議員会(の審議)が成立することが確認された。その後、2019年度議長を兵頭政幸評議員に、議長代理を卜部厚志評議員、須貝俊彦評議員に任命することが決定された。兵頭議長により以下の議事が進行された。報告事項については、資料1に基づき、2018年度の各委員会委員長・領域代表または代理の委員・幹事から2018年度事業報告が行われた。また、資料2に基づき、三浦前会計委員長から2018年度決算報告、水野会計監査から会

計監査報告が行われた。さらに、齋藤会長より学術会議・INQUA関連の報告が行われた(本通信の日本学術会議シンポジウムおよびINQUA2019ダブリン大会報告参照)。審議事項については、水野庶務委員長から、資料3に基づき2019年度事業計画が説明され、承認された。また資料4に基づき、2019年度予算案が説明され、承認された。編集委員として亀井翼会員・松多信尚会員を、学会賞選考委員として山崎晴雄会員を、論文賞選考委員として宍倉正展会員を、それぞれ追加する提案が出され、承認された(資料7参照)。資料5に基づき、編集委員会規程を一部改正(編集委員を各領域1名以上と変更)する提案が行われ、承認された。資料6に基づき、会則の付則の一部改正(事務局の所在地表示の変更)の提案が行われ、総会に諮ることで承認された。全議事終了後、24日の表彰式に出席できない学術賞受賞者の長橋良隆会員へ表彰状授与を行った。

**資料1 2018年度事業報告(2018年8月1日～2019年7月31日)**

1-1 庶務委員会

- 1) 総会（1回）・評議員会（3回）・執行部会（7回）を開催した。また、電磁的な評議員会を2回、電磁的な執行部会を3回開催した。
- 2) 入退会の申し出への対応を行い、会員名簿の管理を行った。2018年度末（2019年7月31日）における会員数は以下の通りである。正会員1,016名（うち学生会費適用者8名）、賛助会員9社、名誉会員16名。  
逝去会員：熊井久雄名誉会員、阪口 豊名誉会員、辻本崇夫会員、永塚鎮男会員、広岡公夫会員、長内優之会員
- 3) 会員登録情報の管理を行った。
- 4) 学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考、論文賞・奨励賞受賞者選考に関する業務を行った。
- 5) 転載許可・受け入れ図書 の整理を行った。
- 6) シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行った。
- 7) ウェブ選挙実施に向けて、会員マイページを立ち上げ、会員情報の電子登録およびその周知を行った。
- 8) 選挙管理委員会を立ち上げ、会長・副会長・評議員選挙に関する業務を行った。
- 9) その他、学会活動に関する庶務業務を行った。

#### 1-2 会計委員会

- 1) 会計に関する承認業務を行った。
- 2) 2018年大会において、2017年度の収支決算を報告し、2018年度の予算案を提案した。
- 3) 2018年度の収支決算を行い、2019年大会において報告する準備を行った。
- 4) 会計監査を受けた。
- 5) 2019年度の予算原案を作成した。

#### 1-3 編集委員会

- 1) 第四紀研究第57巻第5号（特集号4編、書評1編、45頁）、第6号（特集号3編、論説1編、短報1編、65頁）を刊行した。第57巻の総頁数は237頁である（参考：第56巻274頁、第55巻273頁、第54巻367頁）。第58巻第1号（特集号4編、短報1編、資料1編、85頁）、第2号（口絵2編、特集号14編、書評1編、168頁）、第3号（論説1編、総説1編、37頁）、第4号（論説1編、短報1編、書評1編、25頁）を刊行した。
- 2) 2019年8月8日現在、受理済み原稿（書評を除く）は2編（2編は第58巻第5号に掲載予定）、手持ち原稿は論説5編、総説1編、短報2編（特集号5編を除く）である。なお、特集号・雑録・書評を除く投稿数は、2018年は37編（2017年：17編、2016年：22編、2015年：12編、2014年：17編）であった。
- 3) 編集委員会規程の一部改正を執行部会に諮り、承認された。
- 4) メール編集委員会を15回（2018年9月21日～10月4日、11月18日～11月25日、11月30

- 日～12月7日、12月10日～12月16日、12月20日～12月24日、2019年1月16日～1月23日、1月29日～2月5日、4月2日～4月9日、4月16日～4月23日、4月24日～4月27日、5月7日～5月14日、5月18日～5月25日、7月11日～7月18日、7月13日～7月19日、8月5日～8月9日）開催した。
- 5) J-STAGEによる電子ジャーナル化を行っており、2019年7月31日現在、第58巻第3号までのアップロードと公開が完了している。
- 6) 2018年日本第四紀学会学術賞受賞者に受賞記念論文を依頼した。第58巻以降に掲載予定である。
- 7) 2019年1月12日に投稿規定を一部改訂（電子投稿を導入）し、第58巻第1号に掲載した。
- 8) 2019年6月30日に投稿規定を一部改訂（特定不正行為に関わる事項の追加）し、第四紀通信26巻4号と学会HPに掲載した。
- 9) 2018年12月に執筆要項を一部改訂（電子投稿を導入）し、学会HPに掲載し、2019年1月12日から実施した。
- 10) 2018年11月1日付けで、領域4の編集委員の交代を行った。

#### 1-4 広報委員会

- 1) 「第四紀通信」の編集および学会ホームページの維持管理を行った。
- 2) 「第四紀通信」第25巻5、6号、第26巻1、2、3、4号を編集し、発行した。
- 3) 「第四紀通信」上記各号の電子版（PDF版）を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。
- 4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行った。
- 5) 「だいよんきQ&A」に寄せられた質問について、回答者の選定を行い、回答文作成を依頼した。
- 6) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行った。
- 7) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストおよび日本第四紀学会執行部会メーリングリストの管理を行った。

#### 1-5 行事委員会

- 1) 日本第四紀学会2018年大会を2018年8月24日～28日に首都大学東京南大沢キャンパスほかで開催した。
- 2) 日本第四紀学会2019年大会を2019年8月23日～26日に千葉科学大学ほかで開催するための準備を行った。
- 3) 日本第四紀学会2020年大会を2020年8月に大阪市立大学で開催する予定で、開催地関係者と連絡を取り、準備を進めた。
- 4) 第1回受賞記念講演会（講演者：竹村恵二会員、塚本すみ子会員）を2019年1月27日に早稲田大学早稲田キャンパスで開催した。

5) 第2回受賞記念講演会(講演者:森 勇一会員、山崎晴雄会員)を2019年6月30日に東京大学理学部2号館講堂で開催した。

#### 1-6 渉外委員会

1) 2019年日本地球惑星科学連合大会において『第四紀:ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』、『活断層と古地震』の2つのセッションを提案し、開催した。

2) 自然史学会連合の行事に関する業務を行った。

#### 1-7 領域1「気候変動及び海洋の諸プロセス」(領域代表:池原 研)

1) 2016年千葉大会の領域1「気候変動及び海洋の諸プロセス」シンポジウム特集(論文2編)を第四紀研究第57巻6号として出版した。もう1編は第58巻3号に掲載された。

2) 2018年大会にて開催された大会シンポジウムにおいて、領域と学会全体の発展に期するため、会員外の3名を含む5名の講演者を招いて、気候変動及び海洋の諸プロセスについての最新の研究成果の講演をいただいた。

3) 2018年11月13日~14日に東京大学大気海洋研究所で開催された研究集会「海底堆積物から地震履歴をどこまで読み取れるのか」を後援した。集会では50名程度の参加者があり、19件の口頭発表と6件のポスター発表がなされた。

4) 2019年2月13日に首都大学東京国際交流会館中会議室で開催された「水月湖テフラに関する講演会」を領域3、首都大学東京火山災害研究センターと共に企画し、実施した。26名の参加者があった。

#### 1-8 領域2「陸上の諸プロセス」(領域代表:須貝俊彦)

1) 2017年大会のシンポジウム2『陸上の諸プロセス』の第四紀研究特集号を刊行した。

2) 2018年大会において、シンポジウム『洞窟考古・地震学の新展開』を藤原 治会員が中心になって開催した。

#### 1-9 領域3「層序と年代基準」(領域代表:兵頭政幸)

1) 国際地質科学連合(IUGS)の第四紀層序小委員会(SQS)において、千葉県市原市の地層「千葉セクション」が地質時代の「前期-中期更新世境界」の国際標準模式地(GSSP)として承認され、次の審査段階である国際層序委員会(ICS)に答申されたことの情報発信を学会メーリングリスト、学会ホームページにて行った。

2) 国際的に学術的価値が高いと認められる、国内の第四紀地層に関する情報発信を学会ホームページで行うことを企画立案した。日本における国際的第四系として玄武洞玄武岩、水月湖年縞堆積物、チバセクションの3か所を選び、ホームページ記

事の作成作業を開始した。

3) 2018年大会にて開催されたシンポジウムにおいて、2名の会員と1名の会員外の講演者を招き、第四紀の層序と年代に関わる最先端研究の講演を行った。

4) 首都大学東京火山災害研究センター、領域1とともに「水月湖テフラに関する講演会」を開催した(日程:2019年2月13日(水)、会場:首都大学東京南大沢キャンパス)。

#### 1-10 領域4「人類と生物圏」(領域代表:高原 光)

1) 第四紀研究57巻1号と4号を第4領域「人類と生物圏」シンポジウム特集号として編集し、57巻1号には、齋藤めぐみ会員、北村晃寿会員、4号には、工藤雄一郎会員、那須浩郎会員の論説を掲載した。

2) 第四紀学会2018年大会シンポジウムにおいて、領域4として下記の発表を行った。

松井哲哉(森林総研):最終氷期最盛期の植生一種分布予測モデルからのアプローチ、津村義彦(筑波大学):最終氷期最盛期の植生一現生集団を用いた分子遺伝学的アプローチ、高原 光(京都府立大学)・百原 新(千葉大学)・LGM古植生研究グループ:最終氷期最盛期の植生-古生態学的データをを用いたアプローチ。

#### 1-11 領域5「現代社会に関わる第四紀学」(領域代表:植木岳雪)

1) 2018年12月8日(土)に、シンポジウム「日本列島の第四紀多様性:ジオパークの基礎として」をお茶の水女子大で開催した。

2) 2019年大会を銚子で行うにあたり、領域5としての活動を銚子ジオパークと検討した。

### 資料2 2018年度決算報告・会計監査報告(p.17~19)

### 資料3 2019年度事業計画

#### 1-1 庶務委員会

1) 総会・評議員会・執行部会の開催に関連する業務を行う。

2) 入会、退会者の確認を行うとともに、会員名簿の管理を行う。

3) 学会賞・学術賞・若手学術賞の受賞者選考および論文賞・奨励賞の受賞者選考に関する業務を行う。

4) 名誉会員候補者選考委員会を設置し、名誉会員と功労賞の受賞者選考に関する業務を行う。

5) 転載許可・受け入れ図書の実行を行う。

6) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。

7) 日本学術振興会賞などの賞への学会推薦を行う。

8) 規程・内規の改定・制定を行う。

9) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

#### 1-2 会計委員会

- 1) 会計に関する承認業務を行う。
- 2) 2019年大会において、2018年度の収支決算を報告し、2019年度の予算案を提案する。
- 3) 2019年度の収支決算を行い、2020年大会において報告する準備を行う。
- 4) 会計監査を受ける。
- 5) 2020年度の予算原案を作成する。

#### 1-3 編集委員会

- 1) 「第四紀研究」第58巻第5号、6号、第59巻第1号、2号、3号、4号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGEを通じて、電子ジャーナルとしての刊行を行う。
- 2) 2019年大会特集号編集委員会を設置し、編集などにあたる。
- 3) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。

#### 1-4 広報委員会

- 1) 「第四紀通信」第26巻5号、6号、第27巻1号、2号、3号、4号を編集し、発行する。
- 2) 「第四紀通信」上記各号の電子版(PDF版)を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。
- 3) 日本第四紀学会ホームページを管理し、広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。
- 4) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。
- 5) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストおよび日本第四紀学会執行部会メーリングリストの管理を事務局と共同で行う。
- 6) 第四紀学及び第四紀学会の活動を紹介するパンフレットを配布し、普及活動を行う。

#### 1-5 行事委員会

- 1) 2019年8月23日～26日に千葉科学大学ほかを会場として、日本第四紀学会2019年大会を開催する。
- 2) 学会賞・学術賞受賞者講演会を実施する。
- 3) 日本第四紀学会2020年大会を2020年8月に大阪市立大学で開催するため、関係者で検討し、その準備を行う。

#### 1-6 渉外委員会

- 1) 日本地球惑星科学連合における日本第四紀学会の認知度と活動度を高めるために、連合大会セッションについて、『第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層と古地震』を第四紀学会が開催し、第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、ジオパークをはじめ第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的にすすめる。
- 2) 自然史学会連合等、国内関連学協会との連携を

高めていく。

#### 1-7 領域3「層序と年代基準」(領域代表:里口保文)

- 1) 国際的に学術的価値が高いと認められる国内の第四系として玄武洞玄武岩、水月湖年縞堆積物、チバセクションの3か所について、学会ホームページ上での紹介記事を作成する。

#### 1-8 領域4「人類と生物圏」(領域代表:工藤雄一郎)

- 1) 考古学関連でシンポジウムを計画する。
- 2) 2020年大会におけるシンポジウムについて、大会実行委員会と連携して計画を進める。

#### 資料4 2019年度予算案 (p.20)

#### 資料5 編集委員会規程の一部改正

現行の編集委員会規程について、以下の改正を提案する。

##### 【現行】

第2条 本委員会は、評議員の中から選出された委員長と、各領域2名までの委員で構成される。委員は、各領域に所属する会員の中から領域の推薦に基づき選出され、評議員会の承認を経て決定される。委員の少なくとも1名は電子ジャーナルの担当とする。

##### 【改正案】

第2条 本委員会は、評議員の中から選出された委員長と、各領域~~2名まで~~1名以上の委員で構成される。委員は、各領域に所属する会員の中から領域の推薦に基づき選出され、評議員会の承認を経て決定される。委員の少なくとも1名は電子ジャーナルの担当とする。

##### 【改正理由】

領域2に関する投稿が多く、編集担当者に著しい負担が生じている。これを解消するための改訂。

#### 資料6 会則の一部改正

現行の会則について、以下の改正を提案する。

##### 【現行】

付則1 本会事務局は東京都新宿区大久保2丁目4番地12号(〒169-0072)新宿ラムダックスビル10階に置く。

付則3 本会則は2018年8月27日より施行する。

##### 【改正案】

付則1 本会事務局は東京都新宿区大久保2丁目4番地12号(〒169-0072)新宿ラムダックスビルに置く。

付則3 本会則は2019年8月24日より施行する。

##### 【改正理由】

学会事務局を務める株式会社春恒社のオフィスが9階のみに集約されたため。



## 資料 2 2018 年度決算報告・会計監査報告

2018 年度収支会計報告  
(2018 年 8 月 1 日～2019 年 7 月 31 日)

## 収入の部

(単位：円)

科 目	2018 年度予算①	2018 年度決算②	増減②-①	執行率②/①	摘 要
会費収入	10,240,000	9,363,258	-876,742	91.4%	正会員 1,008 名、学生会員 8 名、賛助 9 社
正会員会費収入	10,000,000	9,123,258	-876,742	91.2%	通常会員会費 8,936,000 円 学生会員会費 115,000 円 海外会員会費 72,258 円 20,000 円×9 社 (12 口)
賛助会員会費収入	240,000	240,000	0	100.0%	
誌代	1,000,000	1,214,692	214,692	121.5%	要旨集売上(360,000 円)、定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	750,000	922,852	172,852	123.0%	57 巻 4 号～58 巻 3 号別刷代
雑収入	500,000	534,911	34,911	107.0%	2018 年大会余剰金(406,158 円)、デジタルブック(59,464 円)、JST、著作権料収入等
利子収入	5,000	947	-4,053	18.9%	預金利息
広告料収入	20,000	15,000	-5,000	75.0%	2018 年大会予稿集(2 社)
役員選挙積立金取崩収入	350,000	350,000	0	100.0%	
INQUA 対策積立金取崩収入	300,000	0	-300,000	0.0%	
名簿作成積立金取崩収入	0	0	0		
予備費積立金取崩収入	0	0	0		
収入合計	13,165,000	12,401,660	-763,340	94.2%	
前期繰越金	17,522,459	17,522,459	0	100.0%	
合計	30,687,459	29,924,119	-763,340	97.5%	

## 支出の部

(単位：円)

科 目	2018 年度予算①	2018 年度決算②	増減②-①	執行率②/①	摘 要
会誌発行費	4,400,000	5,366,406	966,406	122.0%	
印刷費	2,500,000	3,520,260	1,020,260	140.8%	第四紀研究 57 巻 4 号～58 巻 3 号 (各 1300 部)
編集費	500,000	377,126	-122,874	75.4%	
編集人件費	1,200,000	1,300,000	100,000	108.3%	編集書記手当
別刷印刷費	200,000	169,020	-30,980	84.5%	第四紀研究 57 巻 4 号～58 巻 3 号
会誌・会報発送費	600,000	555,519	-44,481	92.6%	第四紀研究 57 巻 4 号～58 巻 3 号
会報発行費	810,000	792,690	-17,310	96.6%	
印刷費	550,000	534,168	-15,832	97.1%	第四紀通信 25 巻 4 号～26 巻 3 号 (各 1200 部)
編集費	70,000	72,522	2,522	103.6%	第四紀通信編集費
編集人件費	190,000	176,000	-14,000	92.6%	第四紀通信編集アルバイト代
学会 HP 運営費	150,000	157,977	7,977	105.3%	HP 更新アルバイト代、ドメイン更新料等
大会運営準備金	380,000	380,000	0	100.0%	2019 年大会 (千葉科学大学)
巡検準備金	100,000	100,000	0	100.0%	2019 年大会 (千葉科学大学)
講演会・シンポジウム	100,000	141,500	41,500	141.5%	学会賞学術賞記念講演会 (1/27、6/30)
予稿集印刷費	250,000	191,160	-58,840	76.5%	2018 年大会講演要旨集 (200 部)
学会賞等顕彰費	150,000	113,763	-36,237	75.8%	副賞 1 名 (50,000 円)、賞状作成費
会議費	10,000	38,124	28,124	381.2%	第 1 回執行部会 (8/5)、評議員会当選者会議 (5/26)
通信費	400,000	323,894	-76,106	81.0%	会費請求書発送郵税、事務通信費等
旅費・交通費	600,000	684,800	84,800	114.1%	執行部会等交通費
印刷費	450,000	372,867	-77,133	82.9%	学会専用封筒、コピー代、総会資料
業務委託費	2,400,000	2,363,661	-36,339	98.5%	事務委託費
領域活動費	750,000	93,122	-656,878	12.4%	シンポジウム施設使用料、交通費
領域 1	150,000	54,982	-95,018	36.7%	8/26 開催シンポジウム交通費
領域 2	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域 3	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域 4	150,000	5,840	-144,160	3.9%	8/26 開催シンポジウム交通費
領域 5	150,000	32,300	-117,700	21.5%	12/8 開催シンポジウム施設使用料、交通費
INQUA 対策費	400,000	0	-400,000	0.0%	
役員選挙費	700,000	1,087,196	387,196	155.3%	選挙会告郵送費、ウェブ選挙システム関連費用、選挙管理委員会交通費、選挙関連事務費用等
名簿作成費	0	0	0		
INQUA 対策積立金繰入支出	0	0	0		
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	0		
名簿作成積立金繰入支出	300,000	300,000	0	100.0%	
予備費積立金繰入支出	0	0	0		
加盟学協会分担金支出	60,000	60,000	0	100.0%	地球惑星科学連合、防災学術連携体、自然史学会連合分担金
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	0	100.0%	地学オリンピック協賛金
雑費	55,000	51,166	-3,834	93.0%	熊井名誉会員葬儀用生花・弔電、振込手数料等
予備費	50,000	0	-50,000	0.0%	
支出合計	13,165,000	13,213,845	48,845	100.4%	
次期繰越金	17,522,459	16,710,274	-812,185	95.4%	
合計	30,687,459	29,924,119	-763,340	97.5%	

**貸借対照表**  
(2019年7月31日現在)

(単位：円)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
流動資産		流動負債	
郵便振替	15,229,940	未払金	4,732
小口現金	321,603	前受会費	3,030,308
普通預金	2,271,113	小計	3,035,040
現金(事務局)	88,035	正味財産	
未収金	179,343	名簿作成積立金	600,000
仮払金	55,280	役員選挙積立金	0
固定資産		INQUA対策積立金	300,000
定期預金	10,000,000	予備費積立金	7,500,000
		次期繰越金	16,710,274
		(前期繰越金	17,522,459)
		(当期収支差額	-812,185)
		小計	25,110,274
合計	28,145,314	合計	28,145,314

**財産目録**  
(2019年7月31日現在)

## 資産の部

(単位：円)

科目	摘要	金額
郵便振替	郵便局(年会費振込専用口座)	15,229,940
小口現金	編集書記手許金	321,603
普通預金	みずほ銀行早稲田支店	2,064,524
普通預金	三井住友信託銀行本店営業部	206,589
現金	事務局手持ち金	88,035
未収金	別刷代・超過頁代収入	179,343
仮払金	旅費交通費	55,280
流動資産合計		18,145,314
定期預金	三井住友信託銀行本店営業部	10,000,000
固定資産合計		10,000,000
合計		28,145,314

## 負債の部

(単位：円)

科目	摘要	金額
未払金	旅費交通費	4,732
前受会費	2019年度以降年会費	3,030,308
合計		3,035,040

## 正味財産の部

(単位：円)

科目	摘要	金額
名簿作成積立金	名簿作成積立金	600,000
役員選挙積立金	役員選挙積立金	0
INQUA対策積立金	INQUA対策積立金	300,000
予備費積立金	予備費積立金	7,500,000
次期繰越金		16,710,274
	前期繰越金	17,522,459
	当期収支差額	-812,185
合計		25,110,274

日本第四紀学会

会長 齋藤文紀 殿


2018年度会計監査報告書

日本第四紀学会 2018年度収支決算報告書(2018年8月1日~2019年7月31日)の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。


ここにご報告いたします。

以上

2019年8月 7日

会計監査 水野 清秀 

2019年8月 7日

会計監査 岡崎 浩子 

## 資料 4 2019 年度予算案

2019 年度予算案  
(2019 年 8 月 1 日～2020 年 7 月 31 日)

## 収入の部

(単位：円)

科 目	2018 年度予算	2018 年度決算	2019 年度予算案	摘 要
会費収入	10,240,000	9,363,258	9,340,000	
正会員会費収入	10,000,000	9,123,258	9,100,000	正会員 1008 名 学生会費適用者 8 名
賛助会員会費収入	240,000	240,000	240,000	20,000 円×9 社 (12 口)
誌代	1,000,000	1,214,692	1,100,000	要旨集売上、定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	750,000	922,852	750,000	58 巻 4 号～59 巻 3 号別刷代
雑収入	500,000	534,911	100,000	JST、著作権料収入等
利子収入	5,000	947	1,000	預金利息
広告料収入	20,000	15,000	20,000	大会予稿集広告掲載料
役員選挙積立金取崩収入	350,000	350,000	0	
INQUA 対策積立金取崩収入	300,000	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	0	0	0	
予備費積立金取崩収入	0	0	0	
収入合計	13,165,000	12,401,660	11,311,000	
前期繰越金	17,522,459	17,522,459	16,710,274	
合計	30,687,459	29,924,119	28,021,274	

## 支出の部

(単位：円)

科 目	2018 年度予算	2018 年度決算	2019 年度予算案	摘 要
会誌発行費	4,400,000	5,366,406	4,301,200	
印刷費	2,500,000	3,520,260	2,500,000	第四紀研究 58 巻 4 号 1300 部, 58 巻 5 号～59 巻 3 号各 1200 部
編集費	500,000	377,126	400,000	
編集人件費	1,200,000	1,300,000	1,201,200	編集書記手当
別刷印刷費	200,000	169,020	200,000	第四紀研究 58 巻 4 号～59 巻 3 号
会誌・会報発送費	600,000	555,519	550,000	第四紀研究 58 巻 4 号～59 巻 3 号
会報発行費	810,000	782,690	830,000	
印刷費	550,000	534,168	550,000	第四紀通信 26 巻 4 号 1200 部, 26 巻 5 号～27 巻 3 号各 1100 部
編集費	70,000	72,522	70,000	編集ソフト契約料等
編集人件費	190,000	176,000	210,000	第四紀通信編集アルバイト代
学会 HP 運営費	150,000	157,977	170,000	HP 更新アルバイト代、ドメイン更新料等
大会運営準備金	380,000	380,000	380,000	
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	
講演会・シンポジウム費	100,000	141,500	100,000	シンポジウム・受賞記念講演会開催費
予稿集印刷費	250,000	191,160	150,000	2019 年大会講演要旨集 (200 部)
学会賞等顕彰費	150,000	113,763	45,000	賞状作成費
会議費	10,000	38,124	20,000	会議室使用代
通信費	400,000	323,894	380,000	会費請求書発送郵税、事務通信費等
旅費・交通費	600,000	684,800	600,000	執行部会・委員会等交通費
印刷費	450,000	372,867	440,000	学会専用封筒、コピー代
業務委託費	2,400,000	2,363,661	2,400,000	事務委託費概算払分
領域活動費	750,000	93,122	750,000	15 万円×5 領域
領域 1	150,000	54,982	150,000	
領域 2	150,000	0	150,000	
領域 3	150,000	0	150,000	
領域 4	150,000	5,840	150,000	
領域 5	150,000	32,300	150,000	
INQUA 対策費	400,000	0	0	
役員選挙費	700,000	1,087,196	0	
名簿作成費	0	0	0	
INQUA 対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	250,000	
名簿作成積立金繰入支出	300,000	300,000	0	
予備費積立金繰入支出	0	0	0	
加盟学協会分担金支出	60,000	60,000	60,000	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金、防災学術連携体
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	50,000	国際地学オリンピック協賛金
雑費	55,000	51,166	50,000	振込手数料等
予備費	50,000	0	30,000	
支出合計	13,165,000	13,213,845	11,656,200	
次期繰越金	17,522,459	16,710,274	16,365,074	
合計	30,687,459	29,924,119	28,021,274	

資料 7 2019-2020 年度役員・委員一覧

会長	齋藤文紀	
副会長	鈴木毅彦	高原 光
会計監査	久保純子	松浦秀治
領域 1	領域代表	横山祐典
	領域幹事	阿部彩子、池原 研、池原 実、川幡穂高、中川 毅
領域 2	領域代表	奥村晃史
	領域幹事	片岡香子、荻谷愛彦、小岩直人、宍倉正展、白井正明、須貝俊彦、丹羽雄一、藤原 治、堀 和明、三浦英樹
領域 3	領域代表	里口保文
	領域幹事	青木かおり、卜部厚志、岡田 誠、長橋良隆、兵頭政幸、水野清秀
領域 4	領域代表	工藤雄一郎
	領域幹事	出穂雅実、江口誠一、海部陽介、北村晃寿、近藤 恵、齋藤めぐみ、堤 隆、那須 浩郎、百原 新
領域 5	領域代表	小森次郎
	領域幹事	植木岳雪、小荒井 衛、竹村恵二、目代邦康、山田和芳、米澤正弘
庶務委員会	委員長	水野清秀
	委員	久保田好美、吾妻 崇、江口誠一、前杢英明
会計委員会	委員長	齋藤めぐみ
	委員	阿部彩子、三浦英樹、青木かおり、植木岳雪
編集委員会	委員長	北村 晃寿
	委員	中川 毅、荻谷愛彦、松多信尚、里口保文、亀井 翼、米澤正弘
広報委員会	委員長	白井正明
	委員	オブラクタ スティーブン フィリップ、兵頭政幸、那須浩郎、植木岳雪
行事委員会	委員長	藤原 治
	委員	池原 実、岡田 誠、井上 淳、目代邦康
渉外委員会	委員長	小荒井 衛 (防災学術連携体)
	委員	山田和芳 (JpGU プログラム)、卜部厚志 (JpGU 環境災害対応)、百原 新 (自然史学会連合)、小森次郎 (地学オリンピック)、植木岳雪 (ジオパーク)
法務委員会	委員	池原 研、竹村恵二、中村俊夫、三田村宗樹、宮内崇裕
2019 年度評議員会	議長	兵頭政幸
	議長代理	卜部厚志、須貝俊彦
2019 年度学会賞選考委員会	委員長	齋藤文紀
	委員	山崎晴雄、中村俊夫、小野 昭、竹村恵二
2019 年度論文賞選考委員会	委員	池原 研、宍倉正展、長橋良隆、紀藤典夫、黒木貴一

◆日本第四紀学会 2019 年度総会議事録

日時：2019 年 8 月 24 日 (土) 16:20 ~ 17:20

場所：千葉科学大学 2 号棟 2208 教室

藤原 治行事委員長の司会で開会され、植木岳雪実行委員長の挨拶、齋藤文紀会長の挨拶に続き、定足数の確認が行われ、正会員の出席 47 名、委任状 146 通 (追加分を含む) で、成立条件を満たしていることが確認された。議長に三田村宗樹会員

が選出され、以下の議事が進められた。2018 年度事業報告 (評議員会議事録の資料 1) について水野清秀庶務委員長から報告された。また、2018 年度決算報告については水野庶務委員長から、会計監査報告については岡崎浩子会計監査から報告が行われた (評議員会議事録の資料 2)。さらに、学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告が齋藤文紀選考委員長から、論文賞・奨励賞受賞者・受

賞論文選考報告が横山祐典選考委員長からそれぞれ行われた（本通信の学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考および論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告の項参照）。続けて、齋藤会長より学術会議・INQUA 関連の報告が行われた（本通信の日本学術会議シンポジウムおよび INQUA2019 ダブリン大会報告参照）。審議事項については、水

野庶務委員長から、2019 年度事業計画（評議員会議事録の資料 3）が説明され、承認された。また 2019 年度予算案（評議員会議事録の資料 4）が説明され、承認された。さらに、会則の付則の一部改正（事務局の所在地表示の変更）の提案（評議員会議事録の資料 6）が行われ、承認された。議事終了後、鈴木副会長の挨拶で閉会した。

## ◆日本第四紀学会 2019 年度第 1 回執行部会議事録

日時：2019 年 8 月 10 日（土）9:30～12:40  
 場所：首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス  
 出席：齋藤文紀（会長）、鈴木毅彦（副会長）、高原 光（副会長）、里口保文（領域 3 代表）、小森次郎（領域 5 代表）、水野清秀（庶務委員長）、北村晃寿（編集委員長）、白井正明（広報委員長）、藤原 治（行事委員長）、吾妻 崇（前庶務委員長：領域 2 代表代理）、三浦英樹（前会計委員長：会計委員長代理）  
 欠席：横山祐典（領域 1 代表）、工藤雄一郎（領域 4 代表）、小荒井 衛（渉外委員長）  
 オブザーバ：永峯菜穂子（学会事務局）、兵頭政幸（前領域 3 代表）

### 議事録

- (1) 前期の役員により委員会・領域の活動報告が行われた（詳細は 2019 年度総会・第 1 回評議員会資料に反映）。
- (2) 新規入会希望（1 名）について審議し、入会が承認された。
- (3) 2019 年 12 月 21 日に開催されるシンポジウム「地球環境変動と人間活動—世界各地で急速に深刻化する地球温暖化の影響と対策—」について、主催の日本学術会議 地球惑星科学委員会 地球・人間圏分科会主催より後援依頼があったことが齋藤会長から報告があり、後援することが承認された。
- (4) 三浦前会計委員長により、2018 年度決算なら

びに学会財政状況の説明と会計監査の報告が行われた。

- (5) 2019 年度予算案について審議し、会計委員会から提案があった原案を一部修正して、総会資料とすることにした。
- (6) 「だいよんき Q&A」継続の必要性について審議した結果、当面は継続することとした。
- (7) 編集委員会より「編集委員会規程」の一部改正について提案があり、第 1 回評議員会で審議することとした。
- (8) 編集委員会より委員 2 名（亀井 翼会員、松多信尚会員）の継続就任の提案があり、第 1 回評議員会で承認を求めることとした。
- (9) 投稿規定に付随している「保証書」の改訂について検討し、次回執行部会（または電磁的執行部会）にて審議することとした。
- (10) マイページの利用方法が分からない会員をなくすための方針について検討し、トップページに会員番号の説明やパスワードを忘れたときの対処方法を明記するとともに、その内容を「第四紀通信」に掲載することとした。
- (11) 第 1 回評議員会・総会資料の内容およびそれぞれの説明者について検討した。
- (12) 8 月 23 日の第 1 回評議員会が終了した後の休憩時間内に、次回の執行部会を開催することとした。

## ◆日本第四紀学会 2019 年度第 2 回執行部会議事録

日時：2019 年 8 月 23 日（金）12:00～13:00  
 場所：千葉科学大学 2203 教室  
 出席：齋藤文紀（会長）、鈴木毅彦（副会長）、高原 光（副会長）、横山祐典（領域 1）、奥村晃史（領域 2）、工藤雄一郎（領域 4）、水野清秀（庶務）、藤原 治（行事）、小荒井 衛（渉外）、兵頭政幸（広報代理）

- (1) 2019 年度若手学生発表賞の選考委員として、加 三千宣（領域 1）、三浦英樹（領域 2）、里口保文（領域 3）、清永丈太（領域 4）、小荒井 衛（領域 5）会員とすることを決定した。
- (2) 銚子大会の総会、受賞式、懇親会などの進行・担当者を確認した。
- (3) 会員 ML の発信権者を広報委員会の 3 名と庶

務委員長とすることを確認した。また、現執行部会員のみのMLを作成することにした。評議員会MLの送受信権などの条件は、昨年度と同じとした。各委員会・領域のMLについては、学会HPサーバ会社のメール転送サービスを利用することも検討することとした。

(4) 年間計画については、例年通り1月～2月に第2回評議員会、6月頃に第3回評議員会を開催することを確認した。また、学会賞・論文賞候補者などの推薦締め切りも例年通り、1月末とした。

(5) 次回第四紀通信(26-5)の記事には、2回の

執行部会議事録や会員マイページ確認のお知らせなども載せることにし、一部は原稿の集まり具合で判断することとした。

(6) 事務局に置かれている第四紀研究、講演要旨集などの多量に余っている在庫品については、シンポジウムなどのイベントの際に、配布することを検討することにした。

(7) 2020年JpGUがAGUとの共同開催となるが、第四紀学会が主催するセッションは日本語発表でも可とし、別に英語だけのセッションを提案するか、さらに検討することにした。

---

### ◆日本第四紀学会 2019 年度第 1 回電磁的な執行部会議事録

編集委員会から提案があった第四紀研究投稿論文に付ける保証書の改訂案(代表者の捺印またはサインをつけることなど)について、2019年8月15日から8月19日にかけて電磁的な審議を行っ

た結果、過半数の賛同が得られ、承認された(改訂された保証書の様式は学会ホームページ内「学会誌」の「各種様式」に示されている)。

★★★ 情報発信を希望される方へお願い ★★★

日頃から日本第四紀学会のコミュニティへ情報提供くださり、ありがとうございます。  
提供された情報の円滑な配信を目指して、広報委員会から皆様へ、以下のお願いを致します。

(1) 情報発信の手段として、ML の積極的な使用をお願いします。  
メール本文に配信内容のタイトルと簡単な情報を書いて  
広報委員会アドレス (jaqua-koho(at)quaternary.jp) へご投稿ください。  
メール本文の情報は常識的な長さでお願い致します。  
広報委員会にて文言の微修正を行う、または投稿した方に情報の修正・追加をお願いすることがあります。  
イベント等の周知などで当該イベントの URL がある場合、その URL も載せてください (ただし上記の通り、メール本文にも簡単な情報も載せるよう、お願い致します)。  
第四紀学にほとんど関連しないものについては配信をお断りすることがあります。  
学会、研究集会のお知らせでも、第四紀学会の会員間で参加費等に不平等が生じるものは配信しませんので、ご了承ください。  
添付ファイルは ML に配信致しません。

(2) 第四紀通信への掲載依頼、日本第四紀学会 HP への掲載依頼も受け付けておりますが、基本的に、主催・後援イベントなど第四紀学会として会員に広く周知する必要があると認められる情報、「公募・助成」情報 (こちらは HP のみの掲載となります) 等に限られます。詳しくは広報委員会アドレス宛に、個別にご相談ください。

(3) 第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報の速報性を重視し、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努めています。奇数月下旬にはホームページにアップするようにしていますのでご利用ください。

日本第四紀学会広報委員会：白井正明・オブラクタ スティーブン フィリップ・兵頭政幸・那須浩郎・植木岳雪

広報書記：岩本容子・奥村公弥子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176